

情報リテラシー教育の評価

～大学基礎教科目として何ができるか～

丸 本 郁 子

Developing Information Literacy —Assessment of a Program at the Undergraduate Level—

Ikuko Marumoto

抄 録

情報リテラシー教育の最近の動きを概観し、本校の必修科目「研究調査法」の評価を行う。検証の尺度として Information Literacy Competency Standards for Higher Education を用いる。研究調査法は上記基準で求められている能力の基礎的部分の導入の役割は果たしているが、より高度な情報活用能力の育成には、全学的な情報リテラシー育成プログラムの開発が求められる。

キーワード：情報リテラシー教育、情報活用教育、高等教育、評価、基準

(2000年9月13日 受理)

Abstract

After reviewing the recent trend of information literacy education in Japan, this paper evaluates the Research Method course at OJJC by using Information Literacy Competency Standards for Higher Education. The course does introduce students to the basics of information literacy. Yet, in order to educate students to be information literate, it is necessary to incorporate information literacy across curricula and in all programs and services on campus.

Key words: Information literacy, higher education, standards, evaluation.

(Received September 13, 2000)

I. はじめに

情報教育は今、教育界で最も注目を集めている話題の一つである。高等教育機関においては、情報通信技術の進展にともない学術情報の流れが一変し、教育改革と平行して大学全体の情報環境の基盤整備がすすめられた^{注1}。その動きの中で情報教育は欠くべからざる要素の一つであり、情報の名を冠した教科目のみならず、学部・学科の新設が進められた。初等・中等教育においても、新学習指導要領（平成10、11年告示）に示されているように、小・中学校においては2002年から、高等学校においては2003年から、情報教育への取り組みが始まる。

本校においては、このような時流の動きとは無関係に、昭和50年代より情報活用に関する教科目が開設され、情報活用能力育成への試みが続けられてきた（丸本）。本稿は、この教科目を新しい動きの中でとらえ直し、今求められている情報リテラシーを育成するのに相応しいものとなっているかを検証するものである。検証の尺度として、アメリカ大学図書館協会（ACRL）が本年（2000年）1月に制定した「高等教育における情報リテラシー基準（Information Literacy Competency Standards for Higher Education）」^{注2}を用いる。教育において重要なのは、目標の設定と同時に、教授法が的確であることだ。したがって、本稿では目標として何が含まれているかを検証すると同時に、その目標を達成するためにどのような教材が用いられ、どのような指導方法が用いられたかに言及する。

用語：「情報教育」という言葉は、現在、様々な意味合いで用いられている。一般的にはコンピュータに関連した「情報工学の教育」「情報処理の教育」または単に「コンピュータ・スキルの教育」といった意味で用いられることが多い。文部省は平成10年に情報教育を「情報活用能力を育成する教育」とであると定義し、その目標を情報活用の実践力、情報の科学的理解、情報社会に参画する態度と明文化した（『情報化の進展に・・・』）。筆者の立場は、「情報教育」＝「情報活用能力の育成」＝「情報リテラシー教育」と考えている。上記3語のうち、特に「情報リテラシー教育」を本稿のテーマを表現する語として選んで用いたのは、この語が国際的に広く用いられている語であると同時に、徐々にそれが先に述べた一般的なコンピュータ関連のみの狭義の情報教育とは異なった意味合いで用いられるようになってきているからである。情報リテラシーの定義は、アメリカ図書館協会（ALA）が1989年に出した報告書の「情報が必要であることを認識することができ、必要とされる情報を効果的に探し、評価し、利用することができる能力」とする^{注3}。本稿中で情報教育という語は、意味合いのずれが含まれていることを意識しつつ、それぞれの立場で用いられているものを混在させて用いるが、必要に合わせてその場での意味を解説する。

仮説：研究調査法における情報リテラシー教育のあり方は、単にコンピュータ・スキル育成に止まらず、多様な情報源の探索・整理・表現法を含み、同時に情報の評価や情報倫理をも踏まえたものとなっている。また、この教科目は孤立して存在するのではなく、全体のカリキュラムの中で一定の位置づけも得ている。しかし、大学全体のカリキュラムとして情報リテラシー教育プログラムの策定にまで至っていないので、まだ十分にその効果

を発揮しているとは言えない。

II. 初等・中等教育の動き

大学における教育は、当然のことながら、入学前に行われる初等・中等教育を基礎として構築されねばならない。しかし情報リテラシーに関わる日本の初等・中等教育は非常にいびつな形でしか行われてこず、現状では、大多数の大学生は、入学前に十分な情報リテラシー教育を受けてきていない（コーンハウザ³⁸）。また現在の小・中・高等学校における急激な情報化への移行にも、その偏りは継承されている。

まず指摘しておかねばならないことは、小・中・高等学校において情報リテラシー教育の重要性は、情報教育という言葉がいまだ存在しなかった頃から、それに相当するものを「学び方の指導」であるとか「図書館利用指導」という呼称でもって、全国学校図書館協議会などが中心となり、十分に認識され、その研究もすすんでいたという事実である³⁴。しかし実施状況はと言うと、ごく先進的な例外を除くと、日本の大部分の学校では、指導の対象となる情報源である学校図書館そのものが貧弱で、しかも指導を担当する教職員(司書、司書教諭)の配置が少なく、大勢としては形だけのものしか行われて来なかった³⁵。いびつな形と先に述べたのは、情報教育は理念としては語られはしたが、実体が存在しなかったという意味である。

この体制が変わってきたのは、1989年に発表された小・中・高等学校学習指導要領（1992年度から段階的に実施）あたりからで、その中に「自ら学ぶ意欲」「主体的に対応できる能力の育成」「学ぶ力をつける」という言葉が並び、課題追求型の授業への転換のきざしが出てきた。学校図書館の重要性への認識もなされ、指導要領の各所に図書館サービスへの記述がある。情報リテラシーに相当する「情報活用能力」という表現は昭和61年（1986年）4月の臨時教育審議会第二次答申に出ている（二村²⁹）。

学校教育が情報化の方向へ大きく動きだしたのは、平成8年（1996年）7月の『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』（第15期中央教育審議会第1次答申）以降で、学校図書館については「高度情報通信社会における学習情報センターとしての機能の充実を図っていく必要がある」と言及されている。平成9年10月には『体系的な情報教育の実施に向けて』（文部省：情報化の進展等に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議第一次報告）が出された。平成10年6月には『子どもたちがもっと自由にインターネットを活用できる環境づくりを目指して』（文部省・郵政省：教育分野におけるインターネットの活用推進に関する懇談会）が出ている。平成10年8月の『情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて』（前掲協力者会議最終報告）は、情報教育を「情報活用能力を育成する教育」と定義し、その目標を示している。また同書は司書教諭を情報教育を担うメディアの専門職と位置づけた。国の方針として「平成13年度（2001年）までにすべての学校を」インターネットに接続することとなった（平成11年度1月『文部省ニュース』）。

上記の答申等を受けて作成された新学習指導要領であるが、「総合的な学習の時間」で

の取り組みの可能性、高校での専門教科目「情報」の新設、中学校での「技術・家庭」においての情報教育の強化等が言われている。しかし、これらの目標と手段に一貫性がなく、小・中学校レベルでは情報が単独の教科としては位置づけられず、「時にはお遊びのような総合的な学習の時間で」扱われることになるので、情報教育が無視され、全く扱われない可能性も大であり、時には「専門的（工学的）な理論に基づくコンピュータの仕組みの理解を教科の一単元（中学）で、時には教科「情報」を3科目に分け（高校）・・・好きにとって良い」というようなカリキュラム構成に対しての危惧が語られている（平山76）。またハードとソフトの整備や、担当教員の養成などの課題は大きく（中川409-411）、安易にインターネットに接続すれば情報が得られるかのごとくに、基本的な学校図書館への物的・人的整備のないままで走りだしているところに、大きな歪みが見られる。

Ⅲ. 大学教育における取り組み

高等教育機関においての情報教育は前述のように、大勢は、情報工学的アプローチ、またコンピュータ・スキルの科目として広く実施されている。では情報リテラシー教育としてのアプローチはどうか。戸田が述べているごとく「情報リテラシー教育あるいは情報活用能力の養成が、大学における基礎教育として取り上げられたのは、日本では最近のことである」（998）。

しかし、だからと言って情報リテラシー教育が空白状態であったのではない。日本図書館協会が『図書館利用教育ガイドライン—大学図書館版—』を提示していることでも分かるように、大学において、この分野の教育を担ってきたのは大学図書館員であった。正規の教科目としてではなく、図書館オリエンテーションとか図書館ガイダンスという形でもって、限られた時間内ではあったが、図書館員は何らかの形で利用者の情報リテラシーをサポートしてきた。最も有効な指導方法として行われているものは学科関連指導と呼ばれている形で、「ある学科目の学習・研究の課程において必要とされる情報探索法・整理法・表現法を学ばせる」もので「通常、教員から要請されて図書館員がその授業時間の一部を使って指導を行」っている（ガイドライン11）。その実施状況は学校図書館界とは異なり、ばらつきはあるにせよ、多くの大学において、一定水準のものが実施されている^{注6}。その理由としては、大学図書館には指導を必要とする多様化した情報源が存在し、国際競争力を維持するためにも高度な情報ニーズがあり、かつ指導を担当する専門的職員としての図書館員の存在があったことがあげられる。しかし伝えるべき情報リテラシーの内容を考えると、「一部ではなくすべての利用者をより自立した情報の使い手とする」ためには、「大学教育のカリキュラムの中にこれを取り込み、全学的な情報教育への統合化を達成しなければならない」（ガイドライン4）との指摘がされている。

カリキュラム化された独立学科目としての指導も少数ではあるが、主として私立大学を中心として実施されてきた。大学設置基準の大綱化以来、戸田の論文にも紹介されているように、最近になって国立大学も含め、教養科目の基礎科目として、また専門科目の一部としてと様々な形態での実施が促進されつつある。しかし、現状はまだ各大学がそれぞれ

のニーズに合わせて、プログラム開発を行っている実験的段階であるとも言える（戸田1000-1011）。その意味で、本校の取り組みの検証を行う事も意味があると考ええる。

Ⅳ. 高等教育における情報リテラシー教育基準

高等教育機関で行っている授業評価の基準として用いるには、アメリカ大学図書館協会（ACRL）が作成した「高等教育における情報リテラシー基準（Information Literacy Competency Standards for Higher Education）」が役立つ。この基準は単に抽象的な目標を羅列するのではなく、達成すべき具体的な行動を明記しているからである。この基準は情報リテラシーを5領域にまとめ、それらをさらに22の行動指標に分け、それぞれに具体的な達成能力が記されている。まずここに、その全体像を紹介する。

なお「基準」本文の表現は「情報リテラシーを持つ学生は・・・する」となっているが、本稿では、内容のみを抽出して記す。また、各項目に付加されている以下の記号は、次節で述べられている本校での取り組みが、その項目をどのセクションで実施しているかを示したものである。[L] 図書館、[C] コンピュータ・センター、[E] 英語学科目（語学基本群、語学統合群）。また [研] は研究調査法で扱っているものを示している。

基準1

必要な情報の性質と範囲を決定する。

行動指標

1. 情報要求を明確に表現する。[研]

（達成能力）

 - a. 研究テーマや情報ニーズを、教員や、クラス、作業グループ、ネット上のディスカッション相手と話し合う。[E] [研]
 - b. 命題（thesis statement）をたて、解明に必要な質問文を作成する。[E] [研]
 - c. テーマを知るために、一般的な情報源を調べる。[L] [研]
 - d. テーマを扱える範囲内に修正し絞り込む。[E] [研]
 - e. テーマを表す基本概念とキーワードを見つける。[L] [研]
 - f. 新しい情報を創造するためには、既存の情報を、独自の考え・実験・分析と結びつけるのだと認識する。[E] [研]
2. 利用可能な様々な種類と形態の情報源を識別する。[研]

（達成能力）

 - a. 情報がいかに公式あるいは非公式に生産・組織化・伝達されるかを知る。
 - b. 知識は学問分野別に組織化され、分野によって情報入手法が異なることを知る。
[L] [研]
 - c. 多様な形態の情報源の相違点と有用性を見分ける。（マルチメディア、データベース、ウェブサイト、視聴覚資料、図書など） [L] [C] [研]
 - e. 一次資料、二次資料の区別をし、学問分野によってその重要性和用法の違いがあ

- ることを認識する。[L] [研]
- d. 各種情報源の目的と対象者を識別する。(一般的か学問的か、カレントか歴史的かなど) [L] [研]
- f. 情報は元となる一次資料のデータから作成されねばならにことを認識する。[研]
3. 情報入手の経費と利益を考慮する。[研]
(達成能力)
- a. 必要とする情報の入手の可能性を確認し、情報収集手段を広げ、身近にない情報の入手方法をどうするかを決定する。(相互貸借、他機関資料の利用、映像、ビデオ、テキスト、音響の入手など) [L] [研]
- b. 情報収集や内容理解に必要な、新しい言語や技能修得の可能性を考慮する。(外国語や専門用語など) [E]
- c. 必要情報入手のために実現可能な全体計画と時間設定をする。[E] [研]
4. 情報ニーズの性質と範囲を再検討する。[研]
(達成能力)
- a. 当初の情報ニーズを見直し、疑問点を明確にし、設問を練り直す。[E] [研]
- b. 情報選択の基準を明文化する。[研]

基準2

必要な情報を効果的・効率的に入手する。

行動指標

1. 必要な情報を入手するために最も適した調査方法や情報検索システムを選ぶ。[研]
(達成能力)
- a. 相応しい調査方法を選ぶ。(実験、シュミレーション、フィールドワークなど) [研]
- b. 各種調査方法の長所および妥当性(適切か)を調べる。[研]
- c. 情報検索システムの収録範囲、内容、構造を調べる。[C] [L] [研]
- d. 調査法や検索システムを用いて情報入手をするために、効率的・効果的なアプローチを選ぶ。[研]
2. 効果的な調査戦略(ストラテジー)をたて実施する。[研]
(達成能力)
- a. 調査方法に相応しい調査プランをたてる。[研]
- b. 情報収集に必要なキーワード、同義語、関連語を探す。[L] [研]
- c. 学問分野や情報検索システムに固有な統制語を選ぶ。[L]
- d. 用いる検索システムに合わせた検索方法やコマンドを考える。(ブル演算式、トランケーション、近接演算子、図書の索引など) [L] [研]
- e. 様々な検索システムにおいて、異なったコマンドやプロトコル、サーチ・パラメターを用い、異なるサーチエンジンやインターフェースに合わせて、検索戦略を実施する。[研]

- f. 学問分野に特有な調査手法を用い探索する。[研]
3. オンラインや、人を介して得られる情報など様々な手法で情報を得る。[研]
(達成能力)
- a. 様々な形態の情報を得るために種々の探索システムを利用する。[L] [C] [研]
- b. 種々の分類体系やその他のシステム（請求記号や索引など）を用いて、図書館内やその他の場所にある情報資料の所在を知る。[L] [研]
- c. . 必要な情報を入手するために、特別なオンラインや、また学内の人的サービスを用いる（相互貸借、ドキュメント・デリバリー、学会、学内研究機関、地域情報源、専門家など）[L] [研]
- d. 一次情報を入手するために調査、手紙、インタビュー、その他の手段を用いる。
4. 必要な場合は探索法に修正を加える。[研]
(達成能力)
- a. 探索結果の量・質・関連性を評価し、他の情報探索法や調査法を利用すべきかどうかを決める。[研]
- b. 入手情報の抜け落ちを調べ、探索法を変更するかどうかを決める。[研]
- c. . 必要な場合には、修正した方法で探索を繰り返す。[研]
5. 情報源から情報とその出典を抽出、記録、管理する。[研]
(達成能力)
- a. 必要な情報を引き出すのに最もふさわしい技術を選ぶ。（コピー／ペースト機能、複写機、スキャナー、視聴覚機器など）[C] [研]
- b. 情報を構築するシステムを作る。[研]
- c. 引用された様々なタイプの情報源を区別し、出典表示に必要な要素と正確な記録法を理解する。[L] [E] [研]
- d. 将来用いるために必要な出典情報を記録する。[L] [E] [研]
- e. 選択し整理された情報を管理するために様々な技術を用いる。[C] [研]

基準3

情報と情報源を批判的に評価し、選択した情報を自分の知識と価値体系へ取り込む。

行動指標

1. 収集情報の中から、引用するために主な考え(メインアイデア)を要約する。[研]
(達成能力)
- a. 本文を読み、主な考え（メインアイデア）を選ぶ。[E] [研]
- b. 本文の内容を自分の言葉で表現し直したり、データを正確に選び出す。[E] [研]
- c. 著者自身の表現の出典表示は明確、適切にする。[E] [研]
2. 情報と情報源を評価するために定めた基準を明文化し適応する。
(達成能力)
- a. 信頼性、妥当性、正確さ、権威、適時性、視点、偏見などを評価するために、種々

- の情報源から得た情報を比較検討する。[研]
- b. 論証に用いられている論理や手法を分析する。[E] [研]
 - c. 偏見、ごまかし、情報操作を見分ける。[研]
 - d. 情報が作り出された文化的背景、物理的状況などを認識し、それらが情報を解釈する上での重要性を理解する。[研]
3. 主な考え（メインアイデア）を統合して、新しい概念を構築する。[研]
（達成能力）
- a. 概念相互の関連性を識別し、論証を加えて、次の新しい概念へ組み込む。[E] [研]
 - b. 最初に得られた思考をより高度に抽象化し、新たな情報を加えて新しい命題を構築する。[E] [研]
 - c. 思考や現象の相互作用を研究するために、コンピュータやその他の技術を用いる（表計算ソフトウェア、データベース、マルチメディア、視聴覚機器など）[研]
4. 新しい情報を既知の知識と照らし合わせ、新しく加えるべき価値、矛盾、その他ユニークな特質などがあるかどうかを見定める。[研]
（達成能力）
- a. 得られた情報が、現行の調査や情報ニーズを満足させるものかを見定める。[E] [研]
 - b. 得られた情報が、他の情報源からのものと矛盾するか、また立証するかを判断する基準を意識的に用いる。[研]
 - c. 集めた情報を基にして結論を出す。[E] [研]
 - d. 学問分野に相応しい手法を用い、構築した理論をテストする。（シミュレーション、実験など）
 - e. データの出典、情報収集ツールと手法の限界、結論の妥当性を考慮し、正確さを判定する。[研]
 - f. 新しい情報を既存の情報や知識と統合する。[E] [研]
 - g. トピックを証明するために用いることのできる情報を選択する。[E] [研]
5. 新しい知識が自分の価値体系に影響があるかを見定め、両者の差異を受け入れる。
[研]
（達成能力）
- a. 文献中に出会った異なった見解を調査する。[E] [研]
 - b. その見解を受け入れるか、受け入れないかを定める。[E] [研]
6. 他の人物、専門家、実務家などとの対話を通じて、情報の理解と解釈の正当性を実証する。
（達成能力）
- a. クラスやその他の場でのディスカッションに参加する。[E]
 - b. トピックについての討論を促進するために作られているクラスの電子通信フォー

- ラムに参加する。(Eメール、電子掲示板、チャットルーム)
- c. 様々な手法を用いて専門家の意見を得る。(インタビュー、Eメール、電子会議)
7. 当初の設問に改訂を加えるべきかを定める。[研]
- (達成能力)
- a. 当初の情報要求が満たされたか、また新たな情報が必要かを定める。[E] [研]
- b. 探索戦略を見直し、必要なら新たな概念を組み入れる。[研]
- c. 用いた情報源を見直し、必要なら他のものへと探索を広げる。[研]

基準4

目的達成のために、個人として、またグループの一員として、情報を効果的に利用する。
行動指標

1. ある作品や発表(実演)の企画と制作に、既存のまた新たな情報を用いる。[研]
- (達成能力)
- a. 作品や発表(実演)の目的や形式に合わせて、内容を構成する。(アウトライン、下書き、ストーリーボードなど) [E] [研]
- b. 作品や発表(実演)の計画と制作に、経験から得た知識や技術に関連づける。[研]
- c. 引用やパラフレーズも含めて、既存のまた新たな情報を、作品や発表(実演)の目的にふさわしい方法で統合する。[E] [研]
- d. 必要なデジタル・テキスト、画像、またデータを、もとの資料やフォーマットから移動し処理する。[C] [研]
2. 作品や発表(実演)の制作課程を修正する。[研]
- (達成能力)
- a. 情報収集、評価、提供活動の記録をつける。[研]
- b. 過去の成功、失敗を振り返り、新たな戦略を考える。[研]
3. 作品や発表(実演)を他の人に効果的に伝達する。[研]
- (達成能力)
- a. 作品や発表(実演)の主旨を最もよく表現し、聴衆に相応しい伝達方法や形態を選ぶ。[研]
- b. 作品や発表(実演)の制作に、広範囲なインフォメーション・テクノロジーを用いる。[C] [研]
- c. デザインやコミュニケーションの原理を取り入れる。[研]
- d. 想定した聴衆に合わせた様式で、明瞭に伝達する。[研]

基準5

情報へのアクセスや利用に関連する多様な経済的、法的、社会的問題を理解し、倫理的、合法的に情報利用を行う。[C]

行動指標

1. 情報や情報テクノロジーに関連する多様な倫理的、法的、社会経済的問題を理解する。
(達成能力)
 - a. 印刷媒体と電子媒体の、プライバシーとセキュリティー問題を認識し論議する。
[C] [L] [研]
 - b. 情報へのアクセスの無料・有料問題を理解し論議する。[L] [研]
 - c. 言論の自由と検閲に関する問題を理解し論議する。
 - d. 知的所有権、著作権、そして著作権のある資料の公正利用問題を理解する。[L]
[研]
2. 情報へのアクセスと利用に関する法律、規則、大学の方針、そしてエチケットを守る。
[C] [研]
(達成能力)
 - a. ネットワークなどの一般に受け入れられているルールに従って、電子討論に参加する。[C]
 - b. 情報源へのアクセスには、定められたパスワードなどのIDを用いる。[C]
 - c. 情報源へのアクセスには、大学の方針に従う。[C]
 - d. 情報源、機器、システムまた施設を保全する。[C] [研]
 - e. テキスト、データ、画像、音響などを合法的に入手、蓄積、発信する。[C] [研]
 - f. 剽窃行為とは何かを理解し、他人の作品を自分のものとししない。[E] [研]
 - g. 人間を対象にした調査に関する大学の方針を理解し守る。
3. 作品や発表(実演)を行う時に、用いた情報源を明記する。[研]
(達成能力)
 - a. 出典を表記する書式(スタイル)を選び、統一してそれを用いる。[L] [研]
 - b. 著作権のある作品を利用する場合、必要に応じ、許諾の記載をする。[研]

V. 大阪女学院での取り組み

上記「基準」のどの部分が、現在本校の教育で取り扱われているかを見てみたい。本校における情報リテラシー教育は、カリキュラム化されたものと、カリキュラム外のものがある。カリキュラム外のものとしては、他の大学と同様に図書館とCALL(コンピュータ・センター)が担当している。以下に各部署が行っている指導を記すが、その後に該当する「基準」の記号を括弧に入れて記載してある。

図書館は新入学者(学生、教職員)に対して、図書館オリエンテーションを実施し、そこで大学における情報センターとしての図書館機能を紹介している(1-1-c, 1-2-c, 2-3-a, 2-3-c, 5-1-a, 5-1-d)。また教員から要請があった場合には、学科関連指導を行い、その授業に必要な情報源の利用法を指導している(1-1-c, 1-1-e, 1-2-b, 1-2-c, 1-2-d, 1-2-e, 1-3-a, 2-1-c, 2-2-b, 2-2-c, 2-3-a, 2-3-b, 2-3-c, 2-5-c, 2-5-d, 5-1-a, 5-1-b, 5-1-d)。同時にレファレンス・サービスとして個別に質問をされた場合にはそれに対応をしている。

CALL (コンピュータ・センター) はコンピュータ利用の技術的な指導と情報倫理を、図書館と同様に、オリエンテーションと各種講習会によって行っている (2-3-a, 2-5-a, 2-5-e, 4-1-d, 4-3-b, 5-1-a, 5-2-a, 5-2-b, 5-2-c, 5-2-d, 5-2-e)。

カリキュラム上での取り組みに関して、本校は2点、独特なものを持っている。一つは、基本的に本校の専攻が英語科であること、つまりリテラシー (読み書き能力) 育成が目的である点である。もう一点は、独立学科目として情報リテラシー育成を目指す科目「研究調査法」を全学生の必修科目としていることである。後者に関しては次の章で述べる。

まず考慮に入れねばならないことは、情報リテラシーと称されている能力のいくつかは、基本的に言語能力 (読み、書き、話し、聞く能力) であるということだ。つまり本学の教育目標は、情報リテラシー育成と根本で重なるものがある。たとえば「基準3」で示されている情報を批判的に評価し、それを自己の価値体系の中に組み込んでいくというプロセスは、本校の目指している「単なるスキルとしての言語教育を超えて、自己を確立し、社会の動きを認識した上でグローバルなコミュニケーションを成立させるための言語習得」という目標と重なる。

1年次には語学基本群のIntegrated UnitとしてReading, Discussion, Academic Writingの3科目がお互いに連携を持ち、四つのコア (平和の追求、宗教と科学、現代と人権、生命の危機) を学ぶ。Readingでは、そのテーマの作品を読み、Discussionではそのテーマに関連した討論をし、Academic Writingでは、そのテーマについて最終的にはペーパー (小論文) 作成をする。つまり学生は、あるテーマを語り、書くために情報を収集し、またそれを効果的にコミュニケーションする事が要求される。技法としては、パラグラフ、メインアイデア、トピック・センテンス、アウトライン、サマリー、エッセイの構成法、引用・出典の表示法、プレゼンテーション、ディスカッション等が含まれる。したがって、このIntegrated Unitで「基準」の以下の項目にふれることになる。(1-1-a, 1-1-b, 1-1-d, 1-1-f, 1-3-b, 1-3-c, 2-5-c, 2-5-d, 3-1-a, 3-1-b, 3-1-c, 3-3-a, 3-3-b, 3-4-c, 3-5-a, 3-5-b, 6-a, 4-1-a, 4-1-c, 5-2-f, 5-3-a)。

2年次になると語学統合群としてTopic Studyがあり、あるテーマについて読み、討論し、リサーチ・ペーパーを書くという技術をさらに定着させる。このように、本校では専攻の英語学習において、情報リテラシー技能を育成する作業の多くの部分が実施されている。

この他にも、個別の教科としてはメディア・リテラシーに関するもの、コンピュータ・コミュニケーションに関するものがあるが、それらは選択科目であり、一部の学生へのみ提供されているので、情報リテラシーを考える上で重要なものではあるが、今回の考察からは除外する。

VI. 研究調査法を検証する

研究調査法は10週間のプログラムで、1クラス33名程度、1年次の全員必修科目である。授業の目標は (1) 在学中に必要な基本的リサーチ・テクニックを身につける。(2) 卒

業後の生活や生涯学習に必要な情報の入手手段の基礎を習得するとしている(学生要覧)。授業展開は表1で示す。

指導方法は体験と主体的学習に重点を置き、二つのポイントがある。一つは主体的学習の動機づけをし、明確な情報要求を持たせる手段として、自分で選んだテーマで小論文(6000字)を書かせることである。この論文執筆のプロセスで、学生は、コンピュータ利

表1：研究調査スケジュール

	指導項目	作業課題
1	イントロダクション：情報リテラシーの必要性 論文作成の10ステップ：ビデオ『図書館の達人』 日本語ワープロ基礎1	論文のテーマ選択 作文「私と図書館」
2	図書館の活用：ビデオ『新図書館の達人』V. 1 レファレンスブック・ツールの活用：種類、索引、 凡例、CD-ROM、 <u>World Book Encyclopedia</u>	論文タイトル作成 レファレンス課題 キーワードリスト
3	館内資料の探し方：OPAC、請求記号 自然語と統制語（NDC、件名）、検索式 文献リスト作成：書誌データ、配列 英語ワープロの基礎2	OPAC 練習問題 文献リスト作成 文献リスト・チェックリ スト
4	広く資料を探す：二次資料：ビデオ『新図書館の達人』 V.：入手法（リクエスト、他館の利用） NDL Web-OPAC→自館 OPAC→Webcat 仮アウトライン、文献カード、情報カード作成	NDL Web OPAC 課題 仮アウトライン作成 文献カード作成 情報カード作成
5	新しい情報を探す：ビデオ『図書館の達人』V. 3 雑誌記事索引、CD-ROM、WINET コンテンツファイル	雑誌記事文献リスト 関連記事のコピー
6	資料の批判的読み：新聞記事の比較 新聞記事入手法：CD-ROM、Online、Web、WINET 縮刷版、切り抜き情報誌	情報カード作成 資料批判ワークシート
7	資料の批判的読み：新聞記事の批判。 論文の書式（日本語）出典表示、引用、文献目録 情報倫理、ワープロの基礎3	論文の一部作成 出典表示 引用文献目録
8	インターネット上の情報、 おすすめサイト作成：Web 評価表 プライバシー、セキュリティー、ネチケット 最終アウトライン、序文、仮設	おすすめサイト作成 最終アウトライン 序文作成
9	英語情報の探し方： <u>UnCover, Reader's Guide to Periodical Literature.</u> 英語情報の記録法：MLA スタイル	<u>Reader's Guide to Peri- odical Literature.</u> 練習問題
10	プレゼンテーション：スライドショーの使い方 スライドショー作成	プレゼンテーション
詳論文の提出 論文作成10ステップ評価表と論文評価表を添付		

〔この科目の評価：小論文（60%）+作業課題（20%）+期末試験（20%）〕

用、様々な媒体の情報の探索・収集・評価、自己決定、新しい情報の再構築、などを体験していく。二番目のポイントは、指導項目のそれぞれにプロジェクトと称するワークシート、カード、リスト作成などの具体的作業が課されていることである。つまり Meyers と Jones が述べている active learning（主体的学習）に通じる手法を用いている（19-32）。

以下に授業の進行に合わせて、その指導項目と指導方法（*印）を記し、それに対応する「基準」項目を括弧に入れて記載する。

1 週目

1-1. インTRODクシヨン：授業の目的を伝え、情報化社会における情報リテラシーの重要性を認識さす。

*スケジュール（表1）を渡し、自分の時間を計画的に管理させる。（1-3-c）

1-2. 論文を書く手順。（1-2, 2-1）

*ビデオ「図書館の達人：レポート論文のまとめ方」を見せ、論文作成の10ステップを示す。視聴後ディスカッションを行い、過去の自分のレポート作成の手法と比較をさす。（1-1-f, 2-1-a）

1-3. 「ステップ1：テーマ選択」。テーマを決定し、それを絞り込むプロセスは学生にとって大層むつかしい。単に絞りこみなさいと言っても理解できない。そこで、

*「テーマ選択チャート」を用い様々な視点で内容の絞り込みを行う例を示す。（1-1-d）

*「テーマ選択ワークシート」を用い自分の興味のある事柄を意識させる。（1-1-a, 1-1-d）

1-4. コンピュータ・ワープロ実習：コンピュータやワープロを使えない学生はまだ大部分である。期末には自由に操作できるようにするために最初の時間に導入をし、以後毎週、少しずつ作業課題を与えていく。

*「ワープロ作業ファイル：私と図書館」をデスクトップ上に入れておき、編集作業の実習をさす。（4-1-d, 4-3-a, 4-3-b）

*「私と図書館」というテーマで、ワープロを用い作文を書く。教員は学生の図書館経験を知ると同時に、文章を論理的に展開する能力の実状を把握する。自習室に学生アシスタントを配備し、コンピュータ利用に関する技術サポートをする。（4-1-d, 4-3-a, 4-3-b）

2 週目

2-1. 図書館の使い方（種類、サービス、メディア、配置、分類、請求記号、配列、目録）：図書館がネットワークで結ばれ、世界に開かれた情報の窓であること、情報利用の権利を保障する機関であることを認識さす。（2-1, 2-3, 1-3）

*「新図書館の達人」v. 1を見せる。（1-2-c, 1-3-a, 2-1-a, 2-1-b, 2-1-d）

2-2. レファレンス・ブックの活用法（種類、索引、凡例）。

*サンプル・ページを用い説明をする。（2-1-c, 2-3-b）

*CD-ROM版の World Book Encyclopedia のデモンストレーション。（2-2-9c, 2-2-d,

2-3-a)

- *レファレンスブック、CD-ROMの練習問題を課し、多様なレファレンス・ブックを用いる体験をさす。(2-1-c, 2-1-d, 2-4-a)

2-3. 「ステップ2：事前調査」。自分のテーマに関する概略の知識を得たり、また細かなデータを得るために参考図書が有益であることを体験さす。(1-1, 2-2)

- *キーワードリストの作成。レファレンスブックを用い、テーマについて調べさせ、調査過程で用いるアクセスポイントとなるキーワードを識別させ、分類整理し、ワープロを用いリストアップさせる。(1-1-c, 1-1-e, 2-2-b)

2-4. 論文のテーマを絞り込む。(1-1, 2-2)

- *「タイトル・サブタイトルワークシート」を用い、事前調査で得た情報をもとにテーマを限定さす。自分の情報要求、つまり、何を知りたいのかを明確にし、それを他人にも分かるような形で表現させる。(1-1-a)

- *「テーマについての問題ワークシート」を用い、様々な視点で知りたい事柄を疑問文にして書き出させる。(1-1-b)

3 週目

3-1. 図書館内資料の探し方：OPACの使い方（アクセスポイント、文字による検索結果の違い、自然語と統制語、NDC、件名、複合検索、データの読みとり）。

- *OPAC利用の宿題を出し、上記の事柄を体験さす。自分のテーマの図書の検索をさす。(1-2, 2-3)

3-2. 文献リストの作成（書誌データ、記録法、配列法）：OPACで探した自分のテーマの図書を、MLAスタイルに準じて、ワープロでリストアップする。図書選択基準を明確に意識させる。(2-3-b, 2-4, 2-5-a)

- *「文献リストチェックリスト」を用い、学生相互に文献リスト作成の書式に従っているかをチェックさせる。(2-5-b, 2-5-c, 2-5-d, 2-5-e)

4 週目

4-1. 二次資料の存在と使い方：本校図書館にない資料を広く探し、所在場所を特定し、入手方法を知らせる（リクエスト、インターライブラリーローン、他館訪問、必要経費）。(1-2, 1-3, 2-3)

- *ビデオ『新図書館の達人』V. 2を見せる。

- *インターネットでNDL Web-OPACを用いる。探し出した資料が自館にあるかをOPACで検索さす。無い場合はインターネットでWebcatを用い所在を探索さす。作業用ワークシートを用いる。(1-3-a, 2-1-c, 2-2-b, 2-2-c, 2-3-a, 2-3-b) (1-1, 2-2, 4-1)

4-2. 「ステップ3：仮アウトライン作成」

- *サンプルアウトラインを示し、必要事項、留意点を指摘し、仮アウトラインをワープロで作成する。(1-1-d, 2-2-a)

4-3. 「ステップ4：文献カード作成」探し出した資料をカード化さす。

- *サンプルを示し、自分のテーマの文献カードを最低10枚作成する宿題。(1-3, 2-1)
- 4-4. 「ステップ6：情報カードの作成」資料から必要情報をカードに記録する。直接引用、間接引用、自分の考察などを区別して記録する。出典の記録法の指導。(2-5, 5-2)

*サンプルを示し、まず2枚作成する宿題を出す。

5 週目

- 5-1. 雑誌記事の存在、利用価値、検索法、書誌情報の記録法：雑誌記事は専門的情報、新しい情報、事件当時の状況を知る、小さなテーマ・断片情報を知るには役立つことを指摘。過去の記事と最新記事の検索法。雑誌の性格。(2-1)
 - *ビデオ『新図書館の達人』V. 3を見せる。
 - *「雑誌記事索引」CD-ROMのデモンストレーション。
 - *WINETで記事検索をし、探した記事を掲載する雑誌が本校の図書館にあるかをOPACで検索し、無い場合にはWebcatで検索する作業をワークシートで行う。(2-1-b, 2-1-c, 2-1-d, 2-2-d, 2-2-e, 2-3-a, 2-3-b, 2-3-c)
 - *探し出した雑誌記事の文献リストをワープロで作成する。記事選択基準を意識さす。(2-5-c, 2-5-d, 2-5-e)
 - *記事の一つをコピーしてくる。書誌事項を記録さす。著作権を尊重さす。(2-5-c, 5-1, 5-2-e)

6 週目

- 6-1. 新聞記事の価値、特徴、探索法、記録法：(Web上の無料サイト、有料サイトの指摘、検索記事の入手法、縮刷版、CD-ROM、切り抜き情報誌の存在)。(1-2)
 - *ワークシートを用い、インターネットで日本語と英語の新聞記事検索を体験さす。(1-2-c, 1-2-d)
- 6-2. 情報の批判的読み：新聞記事の比較。(1-2, 3-1, 3-2)
 - *同じ情報源の統計情報の報道を4社の記事からコピーをしたものを比較して読ませる。ワークシートを用い、調査の内容・方法の確認、見出しの取り扱いの違い、取り上げている項目の選択の違い、独自の取材の有無、署名の有無、新聞社の姿勢などを考察さす。情報は発信者の主観の産物であること、情報操作の可能性などを認識さす。(1-2-d, 1-2-e, 1-2-f, 3-1-a, 3-1-b, 3-1-c, 3-2-a, 3-2-b, 3-2-c, 6-2-a, 6-2-b, 6-2-c)
- 6-3. 情報カードの作成：種々の情報源から得た新しい情報を1項目、1枚で記録さす。次週までに20枚以上作成することを宿題とする(2-5-a, 2-5-b, 2-5-c, 2-5-d, 2-5-e, 3-1-a, 3-1-b, 3-1-c)。

7 週目

- 7-1. 資料の批判的読み：論文の比較。(3-2)
 - *時代と視点の異なる論文を二つ読ませ、ワークシートを用い、おのおのの論点の違いの指摘、それに対する自分の意見の構築をさせる。(3-2-a, 3-2-b, 3-2-c, 3-2

-d,

7-2. MLA の書式に従い、論文を仕上げる形式を伝える。(5-1, 5-2, 5-3)

*ワークシートを用い、7-1で用いた論文を引用また要約しながら、出典表示、引用、注、引用文献目録の記述形式を練習する。(3-1-a, 3-1-b, 3-1-c, 5-2-f, 5-3-a, 5-3-b)

*上記資料を用い、ワープロの編集技術を実習する。(3-3-c)

*上記で学んだ書式を用い、自分の論文の一部を作成する宿題を課す。(3-1-a, 3-1-b, 3-1-c, 3-3-c, 5-2-e, 5-2-f, 5-3-a)

*論文作成マニュアルとサンプルを示す。

8 週目

8-1. インターネット上の情報源を知る。(特徴、検索エンジン、アドレス、ドメイン、リンク、検索式、プライバシー、セキュリティー、ネチケット、有用なサイト例、論文に引用する場合の表示法など)。(1-2-a, 1-2-b, 1-2-c, 1-2-d, 1-3-a)

*ワークシートを用い、サーチエンジンを用いた探し方、検索式を用いた探し方、サイトの信頼性・有用性の検証、ダウンロードと印刷、引用法を練習する。(2-1-a, 2-1-c, 2-3-a, 2-5-a, 2-5-c, 2-5-d, 2-5-e)

8-2. サイト評価。(3-2)

*「Web 評価表」(表 2) を用いて、自分のテーマに関連するおすすめサイトを選び、クラスで共同して「おすすめサイト集」作成の作業をする。(3-2-a, 3-2-b, 3-2-c)

8-3. 「ステップ7：最終アウトライン」序文、仮説の作成。

*サンプルを配布し、作成のポイントを説明する。(1-4-a, 1-4-b, 3-1-a, 3-1-b, 4-1-a, 4-1-b)

*最終アウトライン、序文、仮説を作成する課題を出す。教員と話し合い修正を加える。(1-4-a, 1-4-b, 4-1-a, 2-4-a, 2-4-b, 2-4-c)

9 週目

9-1. 英語資料の探し方：図書と新聞記事、Web 上の情報の探し方はすでにふれているので、この時期には特に雑誌論文の探し方を指導する。(2-1, 2-3)

*UnCover, Readers ヽ Guide to Periodical Literature の使い方デモンストレーション。(2-1-a, 2-1-b, 4-1-b)

*ワークシートを用いた UnCover, Readers ヽ Guide to Periodical Literature の練習問題。(2-2-a, 2-2-b, 2-2-c, 2-2-d, 2-2-e, 2-3-a, 2-3-b)

9-2. 英語論文の書式：MLA スタイルを用いる。

*ワークシートを用い、出典表示、引用文献目録作成の練習問題をする。(4-1-c)

10週目

10-1. プレゼンテーション技法。(4-3-a, 4-3-b)

*ワークシートを用い、発表する内容を事前にまとめさす。(4-1-a)

*スライドショー（プレゼンテーション用ソフト）の様々な機能を用い、効果的な画面構成を考え、資料を作成する。(4-1-d, 4-3-a, 4-3-b, 4-3-c)

*クラスの前で自分の論文の主張を発表さす。(4-3-d)

小論文提出

11-1. 「ステップ10：論文の仕上げ」知りたい事柄の答をだし、その答を新しい説としてまとめ上げる。自分の主張を論理的に展開し、他人に分かるように文章として提示する。(2-4-a, 2-4-b, 2-4-c, 3-1, 3-2, 3-3, 3-4, 3-5, 3-7)

*教員が提出された小論文を評価する時に用いる「論文評価表」（表3）を前もって渡しておき、仕上げる時に、自分の論文を再点検さす。(3-7-a, 3-7-b, 3-7-c)

11-2. 論文作成過程の自己評価。(3-7, 4-2)

*論文作成の10ステップを自分がどう行ったかを振り返るために、論文提出時に同時に、「作成過程評価表」（表4）を提出させる。論文作成プロセスの全般を通して、各段階での作業結果が適切か、軌道修正の必要性があるか等を自己評価し、次の作業につなげる。(4-2-a, 4-2-b)

考察：上記授業の項目を「基準」に照らし合わせると、基準の主たる項目はおおむねカバーされていると言える。

学生の情報活用行動にも変化は生じている。たとえば「基準1：行動指標2：様々な種類の情報源を知る」という項目に関して言えば、授業終了後の学生は課題が出された時に、従来のように、やみくもに図書やインターネットを探すだけではなく、他の情報源を使い分けるようになる。「基準2：行動指標2：効果的な調査戦略」を学んでいるので、思いついたキーワードのみで探し、必要情報にたどりつけないという状況からは脱却し、統制語や検索式を用いて探索するようになってきている。「基準5：情報の倫理的、合法的利用」を学習した結果、従来のように用いた資料の文章をそのまま書き写したレポートの提出はなくなる。

しかし「基準」の各項目の学習がなされているとは言え、それは全て入門的・初歩的レベルに止まっている。たとえば「基準2：行動指標1-c：情報検索システムの収録範囲、内容、構造を調べる」に関して言えば、授業で扱える事柄は、OPACを中心として、数種類のWeb上で無料で使えるシステムや汎用性のあるCD-ROMを紹介するのみである。各学問分野にまたがる多様な検索システムやツール類には触れていない。それらに関する高度な指導は、図書館において学科関連指導という形で、教員から要請がある授業についてのみ、その分野に関する情報源の指導が行われている。つまり研究調査法は最低限の基礎的能力を全学生に対して保証する構造となっている。

特に「基準3：情報源と情報の批判的読みと選択」に関して言えば、この項目は情報リテラシー教育の中心的課題であるので、研究調査法では新聞記事、図書、Webサイトの比較検討作業を行い、評価の視点とその重要性に学生の意識を向ける。しかし、ここで期待される能力は、一度、学習したからと言って身に付くものではない。繰り返し、様々な

授業において、異なるテーマで訓練されることによって自分のものとなる。その意味で、本学においてこの研究調査法が有効であるのは、前述のように、専門科目（英語）の学習の課程で、常に情報を収集しペーパーにまとめる事が要求されるからである。研究調査法が孤立して存在するのではなく、カリキュラムの一部に有機的に組み込まれているメリットは大きい。

指導項目が初歩的段階に止まらざるを得ない原因の一つは、コンピュータ・スキル育成の役割が、研究調査法にまかされている点にある。コンピュータの基礎操作またワープロ機能の指導に、貴重な時間がかかり取られる。同様な科目を全学共通科目として課している京都大学の例を見ると、履修条件にコンピュータ・スキルがあげられている。この大学の学習項目を見ると、コンピュータ・スキルが省かれた分、高度な検索技術を要するシステムの指導が含まれている（長尾、目次）。研究調査法の指導項目からコンピュータ・スキルの基礎部分を省くことが出来ると、学習事項をもっと深めていけることになる。数年前の指導項目には情報化社会の仕組み・人間の情報行動といった事柄や、情報の批判的読みの一つに統計資料が含まれていたが、現在では割愛されている。

その他にこの授業で扱われていない項目は、文献調査以外の調査方法（自然科学また社会科学での手法：実験、シミュレーション、観察、インタビューなど）の紹介と、「基準5」に含まれる社会的コンテクストでの情報利用の指導である。前者の指導は、他の科目の設置を必要とするが、後者については、コンピュータ・スキル部分が他の教科またはプログラムにまかせることが出来るならば、研究調査法において取り上げたい項目である。

学生の達成度は次の3点で評価している。毎回課されるプロジェクトの提出：20%、期末筆記試験：20%、小論文：60%である。2000年度春学期の学生の平均点は80点であった。筆記試験は細かな検索技術や手法を問うものであるが、その平均は85点であった。主体的学習であり、かつ体験を重視した形の授業形態が、学習事項の定着度につながると思われる。教科の達成能力のうち、短期目標ともいえる「短大での学習を支える」という面は、この学生の得点によってある程度、計測できる。しかし長期目標の「生涯学習の基礎を築く」面の測定は授業終了直後に行っても意味がない。「基準」が要求する情報活用能力を持つ人物（information literate student）となるには、この教科を基礎として、他の教科において情報活用能力を発揮せねばならない場面が意図的に生まれ、能力の定着をはかる必要があるからである。

この授業では、達成度の評価は教員が成績をつけると同時に、学生自身に自己評価を行わせ、それをある程度成績に反映させることになっている。なぜなら、情報リテラシーとして要求される能力の一つは、自分の情報探索プロセスや結果の評価を行い、現行の調査に修正を加え、また次の情報要求があった場合に、より有効な手法を選べるようになることだからである。そのために論文提出時に「作成過程評価表」（表4）を同時に提出させている。ここに記載されている学生の自己評価を見ると、個人差はあるにしても、大部分の学生は、大きなプロジェクトを完成した自分に自信を持ち、知的格闘をする面白さを体験したと記している。また一つの作品を完成させるために要求される労力の大きさを実感

するので、他人の著作物を尊重する姿勢が形成されている。

Ⅶ. まとめ

現行の研究調査法を「基準」に照らしあわせると、短期大学の学習を支えるための情報リテラシーの基礎を築くという目標は達成されていると言える。内容の幅も、従来の図書館利用教育が目指してきた図書館利用の枠を越え、またいわゆる情報教育が指すコンピュータ・スキルの育成に偏ることなく、情報活用の一連の流れ——情報要求の認識、収集、選択、整理、統合、伝達、発信——の各プロセスを含んでいるものとなっている。

同時に評価したいことは、本校においては、この研究調査法が有機的に他の教科の学習と統合されていることである。研究調査法で学習することは、あくまで基礎段階である。しかし「基準」が要求する情報リテラシーの定着に必要な実践の場が、他の教科の授業で提供されている。英語学習のプロセスで、常に様々な情報要求があり、批判的選択が必要とされ、表現とコミュニケーションを行う機会がある。その他の授業においても論文作成やプレゼンテーションの場は多く、そこで各専門分野の教員の指導がなされ、資料批判、情報の統合、論理的思考といった能力がより深められている。ともすると日本の他大学においては、たとえ情報リテラシー関連科目が独立学科目となっても、それが他教科から孤立し、学習した事項の定着に結びつかないのが現状であることを思うと、カリキュラムへの統合の重要性を再確認できた。

また、もう一点評価したいことは、図書館やコンピュータ・センターでのサポート体制の存在である。研究調査法で扱うことは、初歩的・基本的事柄のみであるが、学生の情報要求は多様であり、高度な機器操作技術が必要とされる。それらに対して、専門スタッフが上記2施設で対応しているのは心強いことである。ただし、それらは必ずしも大学全体としての情報リテラシー育成という観点から統合された活動とはなっていない。個々の施設の固有のサービスとしての活動であるため、希望する学生、希望する教員のクラスのみへのサービスであり、また、たとえ全員が希望したとしても、それに対応できる体制とはなっていない。

結論として言えることは、研究調査法は情報リテラシーの基礎を作る役割は十分に果たしている。また他の教科目とも連動をしているので、その教育効果が補強されている。しかし、生涯学習へとつながる真の情報活用能力をつけるためには、全学的カリキュラムを構築する際に、統一的視点を持ち情報リテラシー教育の全体像を描き、教科間に有機的な関連を持たせ、また同時に、カリキュラム外のサービスや施設でのサポートも統合したプログラム開発が必要となろう。

Ⅶ. 謝辞

研究調査法は1998年、必修科目となった時から、コーンハウザ由香子さん、木下みゆきさん、そして筆者の3人で担当している。したがって授業プログラムの開発は3人の共同作業である。数々のプロジェクトやワークシート作成はお二人の創意工夫に負うところが

大きい。ここに記して感謝したい。

注

- 1) 学内 LAN 設置状況は私立大学情報教育協会（私情協）の調査によると、私立大学の整備率は約70%、短期大学では約25%である。戸高敏之“大学の情報化と教育改革の現状と展望”『教育と情報』50（2000）：8。
- 2) この基準は American Association of School Librarians および Association for Educational Communications and Technology が1989年に発表した初等・中等教育への情報リテラシー基準“Information Literacy Standards for Student Learning.”（Information Power. American Library Association, 1998）を高等教育機関において継続・発展させるものとして作成された。どちらも情報の評価や情報発信能力の育成、また情報利用の社会的責任といった面に重点が置かれている点は共通している。両者を比較すると、初等・中等教育向けの基準の方は、より広く生涯学習を支える能力の育成に重点を置き、基本的なコミュニケーション能力（話し聞く力）や、人格教育につながる芸術作品の鑑賞、自学自習能力の育成、また地球市民としての貢献といった面にふれられている。それに比べて高等教育向けの当基準は、より学問分野への理解と研究調査方法に重点がおかれている。
- 3) “Information literacy is a set of abilities requiring individuals to recognize when information is needed and have the ability to locate, evaluate, and use effectively the needed information.” American Library Association. Presidential Committee on Information Literacy. Final Report.<<http://www.ala.org/acrl/nili/ilist.html>>
- 4) 全国学校図書館協議会利用指導委員会『自学能力を高める学校図書館の利用指導』全国学校図書館協議会 1982。
- 5) 1997年度の調査では、平均蔵書数は小学校7000冊弱、中学校8000冊強、高等学校21000冊。年間予算の平均額は小学校50万円、中学校76万円、高等学校168万円。司書の配置率は小学校22%、中学校26%。高等学校87%である。利用指導実施状況のデータを見ると、小学校92%、中学校77%、高等学校92%と一見高い数値を示している。しかし指導時間の平均を見ると小学校4時間、中・高2時間であるから、その内容は単純な利用案内程度であると察せざるを得ない。全国学校図書館協議会『データで見る今日の学校図書館：学校図書館白書3』1998：11, 13, 18, 27, 31, 70-71。
- 6) 『図書館年鑑1999』によると、大学図書館においてオリエンテーションより進んだレベルの利用教育の実施状況は、国立大学73%、公立大学65%、私立大学76%、短期大学81%である。P. 269。

引用文献目録

- コーンハウザ由香子・木下みゆき“電子情報環境下の利用者教育：大阪女学院短期大学における‘研究調査法’必修科目としての実施事例報告”『大阪女学院短期大学紀要』28（1998）：71-100。
- 中央教育審議会『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』（第一次答申）（1996. 7. 19）文部省 <<http://www.monbu.go.jp/singi/cyukyo/00000151>>（2000. 7. 21）
- 戸田光昭“大学における情報リテラシー教育——情報活用能力を高めるための基盤として——”『情報管理』42.12（2000. 3）：997-1012。
- 長尾真『大学生と「情報の活用」：情報探索入門』京都大学図書館情報学研究会1999。
- 中川正樹“情報教育——今行われようとしていること——”『情報の科学と技術』50. 8（2000）：406-413。
- 日本図書館協会利用教育委員会『図書館の達人 Part II（6）レポート・論文のまとめ方』紀伊国屋1993。
- 日本図書館協会利用教育委員会『図書館利用教育ガイドライン—大学図書館版—』日本図書館協会1998。
- 二村健“学校図書館情報化指針の意義とねらい”『学校図書館』No. 583（1999. 5）：28-36。

- 平山満義 “情報教育の現状と課題” 『教職課程』 2000. 9 : 76-78。
- 丸本郁子 “「情報学」の試み” 『大阪女学院短期大学紀要』 8 (1977) : 35-50。
- 文部省 『学習指導要領』 (1999. 3) <<http://www.monbu.go.jp/series/00000052>> (2000. 7. 21)
- 文部省：情報化の進展等に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 『体系的な情報教育の実施に向けて』 (1997. 10. 4)
<<http://www.monbu.go.jp/series/00000026>> (2000. 7. 21)
- ACRL Task Force on Information Literacy Competency Standards. “Information Literacy Competency Standards for Higher Education : The Final Version, Approved January 2000”
College and Research Library News. March 2000 : 207-215。
- Myers, Chet and Thomas B. Jones. Promoting Active Learning : Strategies for the College Classroom. San Francisco, Jossey-bass Publishers, 1993

資料

表2		おすすめサイト作成プロジェクト	
次の評価表を用いて、あなたのおすすめサイトを選び、ワークシートに書き入れなさい。			
1. あなたのテーマに関連するもの		2. 楽しいお役立ちサイト	
評価項目	観 点		
1. 正確さ、信頼性 ・作成者はだれか。連絡がとれるか。 ・作成者の資格、能力はどうか。 ・情報源は記載されているか。	・ 筆者名、機関名、組織名 ・ メールアドレス、住所、電話番号 ・ URLのドメインはなにか。 ac, go, com,		
2. 客観性 ・ 情報提供の目的は何か、宣伝かどうか。 ・ 正確な情報か、厳密か。 ・ 作成者の意見・立場はどうか。	・ 広告、PR 情報か。 ・ バイヤスがないか。 ・ 参考文献があるか。		
3. 鮮度 ・ いつ作成されたか。 ・ いつ更新されたか。更新頻度。 ・ リンク（があれば）は新しいか。	・ 更新日時の記載はあるか。 ・ 開けないリンクがないか。 ・ 新しいか。 ・ ニーズに合っているか。		
4. 有用性 ・ 利用目的に相応しいか。 ・ 情報要求が満たされるか。	・ 学問的か、娯楽か、実用情報か。 ・ 真面目か、皮肉か、ユーモアか。 ・ 記事か、統計か、解説か、意見か。 ・ 最新情報か、歴史的記述か。		
5. 使い勝手 ・ 分かりやすいか。魅力的か。 ・ 文字情報とイメージ情報のバランス。 ・ リンク、サーチ機能は適切か。	・ 無料で提供されているか。 ・ ページ内の移動は解りやすいか。 ・ 利用するのに特別なソフトが必要か。 ・ プリント、ダウンロードできるか。		
テーマ		1. 信頼性 ○ △ ×	
サイト名		2. 客観性 ○ △ ×	
アドレス		3. 鮮度 ○ △ ×	
コメント		4. 有用性 ○ △ ×	
		5. 使い勝手 ○ △ ×	
テーマ		1. 信頼性 ○ △ ×	
サイト名		2. 客観性 ○ △ ×	
アドレス		3. 鮮度 ○ △ ×	
コメント		4. 有用性 ○ △ ×	
		5. 使い勝手 ○ △ ×	

表3

研究調査法：論文評価表

(論文を提出する時に最初に綴じ込み提出する)

クラス _____ 学籍番号 _____ 氏名 _____

論文表題 _____

評価項目	評価		
1 形式：表紙（必要情報）	A	B	C
2 アウトライン	A	B	C
3 本文：パラグラフ	A	B	C
4 ：注	A	B	C
5 ：引用	A	B	C
6 ：出典表示記述形式	A	B	C
7 ：用語・文体	A	B	C
8 引用文献目録：数量	A	B	C
9 ：タイプ	A	B	C
10 ：出版年度	A	B	C
11 ：記述形式	A	B	C
12 序論：仮説	A	B	C
13 ：論文の目的（何を知りたいか、なぜか）	A	B	C
14 ：定義（範囲、時期、言葉の意味）	A	B	C
15 ：調査方法	A	B	C
16 本文：論理的展開	A	B	C
17 ：十分な証拠	A	B	C
18 ：内容的満足度	A	B	C
19 結論：序文の目的を達しているか	A	B	C
20 ：本文の内容から適切に導き出されているか	A	B	C

合計数

点数

論文評価 _____

コメント _____

論文提出時に添付提出

表4 作成過程評価票

2000年秋 クラス _____ 学籍番号 _____ 氏名 _____

論文作成 10 Steps を自分がどのように行ったかを評価しなさい。
何をどのように行ったら役だったか？どの点が不足して困ったか？自由コメント等。

Step 1 題材選び

Step 2 事前調査

Step 3 仮アウトライン作成

Step 4 関連文献の調査

Step 5 利用文献の入手

Step 6 情報カードの作成

Step 7 最終アウトラインの作成

Step 8 執筆と校正

Step 9 出典の表示

Step 10 仕上げ

自由コメント